

令和7年度一般選抜
個別学力試験問題(後期日程)

総合問題

(法文学部法経学科・社会文化学科)

注意

1. 問題紙は指示があるまで開いてはいけません。
2. 問題紙は13ページ、解答用紙は3枚、下書き用紙は3枚です。指示があってから確認し、解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください。
3. 答えはすべて解答用紙の所定のところに記入してください。
4. 答えは横書とします。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 試験終了後、問題紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

1 次の文章を読んで、後の問い(問1～問5)に答えなさい。

少子・高齢社会に入り、老・病・死の形態とそれらを取り巻く社会情勢は大きく変わりつつある。しかし、変化の中でも確かなことは、団塊世代約700万人がこれから老・病・死に向かうという現実である。大量の高齢者が存在し、その高齢者には、多様でより困難な病が待ち受け、そして最後に大量の死が訪れる時代が目前なのだ。

伝統仏教は、巨大なボリュームで襲ってくる老・病・死に対処し、それらに耐える体力、気力、知力を持ち合わせているのだろうか。大量の死にフズイする^①「苦」や「悲」や「痛」に向き合うことができるのか。しかもそれをきちんと受けとめ、社会的展開や解決に向けての方策を具体化できるのだろうか。

団塊世代の価値観は多様だ。そして、それ以前の世代と比べて彼らの宗教、とくに^A伝統仏教に対する評価は高くなく、身近なものとはしていない。これも特徴的だ。

私は1948年生まれ。団塊世代とは、わが世代のことを言う。戦後に生まれ、一貫し徹底した民主教育を受けたわが世代の教科書に「宗教」「仏教」は、ほとんど見えなかった。国家神道が大敗に導く原因の一端となり、日本仏教は兵士を鼓舞し戦地へ送った。そのような認識に立って、戦勝国アメリカの民主主義は、学校教育の中から宗教を消した。

競争率のはげしい受験戦争をくぐり抜けて入った大学は、70年安保の渦中であつた。団塊世代は全共闘世代ともいわれ、その多くはロックアウトされたキャンパスで何カ月もの日々を過ごした。その時代、全共闘運動の思考や行動の原理となっていたのはマルクス・レーニン主義であり、これはわが世代の多くにとってみれば「宗教」のようなものであつた。マルクス主義は既成宗教を対極に置き、無視し排除した。このことは団塊世代にとっては、いわば宗教に関する「三つ子の魂」のように意識の深層に刻まれている。

しかし、全共闘世代は思い通りに社会を変革できなかつた。そのザセツカンは^②この世代を早々に(B)へと導いていく。今度は高度経済成長のど真ん中で、わが世代は「モノ」を崇めながら生き始めるのである。昨日よりは今日、今日より

は明日、と日々新しい生活用品が家庭に提供される時代が到来したのである。これらは明らかに私たちの国が「モノ」信仰にシフトしたことを実感させ、当然、経済は——1970年代の二度の石油危機をはさみつつも——急激に右肩上がりのラインを描いた。その上昇ラインを支えたのは、昼夜の区別なく働き続けたわが世代だったのだ。

1980年代チュウバンから90年代初めにかけて、日本社会はバブル景気に沸いた。③ 団塊世代が、社会の中核を担う、働き盛りの40代前後のことだ。異常な景気の沸騰は、泡の^{ことわり}理のごとく、一瞬の夢として砕け散ることになるのだが、バブルにおける一連の動きに団塊世代は大きな役割を担っていた。そして、バブル崩壊後、長期にわたって続く不況の中で、団塊世代は経済・企業活動からリタイアをはじめたのである。

戦後の民主化・近代化とともにあった団塊のわが世代。その半生史は前段のごとくである。華々しい時代を自ら演出し、演じもしたこの世代はいま、塊のまま終息に向か^Cって動き出している。団塊世代は残された老・病・死に向かう道を確実にたどり始めたのだ。この後のおよそ30年間には700万人近い同世代が老い、さまざまな病に苦しむ社会が見える。そして団塊世代700万人のほとんどは、どうがんばってもこの30年+ α で死に絶えていく。このような状況を呈する社会を、いままでこの国は経験したことがない。たとえば、あの激烈な満州事変以後太平洋戦争終結までの15年間でさえ、日本国内および戦地における戦没者数は310万人だったと言われている。つまり、この後のおよそ30年には民族として未経験の巨大な死(大量死)が日本国内に横たわるはずなのである。

世界史はいままで大量死があったことを記している。たとえば、中世ヨーロッパで猛威をふるった疫病の肺ペスト。1346～51年の間にヨーロッパの全人口のおよそ四分の一に当たる2,400万人が死んでいる。また、1845～49年にアイルランドを襲ったじゃがいも飢饉^{きん}は、人口860万人のうち、およそ100万人の生命を奪っている。

この二つの大量死は、それを原因としてその後、ヨーロッパ社会に共通の影響を見せていることに注目すべきだろう。ペストも飢饉も老若弱者だけでなく生産

年齢層に対しても死をもたらした。人口激減は労働力の欠乏を生み、それは必然的に労働市場と生産システムの混乱を起こすことになる。大量死によって社会システムは転換せざるを得なくなったのだ。

混乱はそればかりではなかった。大量死は死の実相を人々の間近に見せたのだ。町は死者であふれ、死臭に満ちたといわれる。その不安や恐怖の中で、人々は死を一人称化し、自分自身の死としてとらえざるをえなかったのである。「メント・モリ＝死を想え」というラテン語は、そんなときに生まれたとされる。

こういった場合、人々が死に対する恐怖や不安への救済を求めて行く先には教会があった。しかし、人々を救うべき教会はその機能を発揮できなかったという。当時の教会は分裂によりその地力(宗教力)を低下させ、聖職者たちは墮落していたといわれている。平和で何ごともない時代だったならば、本来の使命を放棄し、自己点検を忘れ、タイダに目先の権力闘争に執着していても、体制は維持できる。しかし、ペストは猛威をふるい始めた。予測をはるかに超えた大量死が襲ってきたとき、そのボリュームの大きさと苦しみに対する人々の切実な要望に、教会は耐えられなかったというのだ。呆然と大量死を見つめるだけで、宗教としての機能を果たさなかったのである。

ハンス・ホルバインの有名な版画シリーズ「死の舞踏」は、死の恐怖を前に人々が半狂乱になって踊り続けるという14世紀の詩が起源となっている。この16世紀の版画の背景には明らかにペストの衝撃があり、「メント・モリ」という死のとらえ方が生まれたプロセスが見える。

「死の舞踏」には擬人化された「死」が、さまざまな職業に属する人々を、骸骨になって踊る姿で墓場まで導く光景が描かれている。生前は異なる身分でそれぞれの人生を生きていても、死に際しては身分や貧富の差なく墓場に向かうのだ、という死生観をリアルに表現したものだ。その行列の中には教皇や修道士も含まれることから、宗教者自身も一般の人々と同じ死を迫られ、同じ恐怖の中にあることを示している。死という苦しみに対しては、宗教者だからといって特別な扱いはされていない。そればかりか膨大な死に対して宗教者は何もできないということ、この版画は暗示しているのだ。

ペスト大流行の後、ボヘミアではヤン・フスが宗教改革を起こしている。宗教

改革の源流には、一般の人々が直面した大量死という巨大な「苦」に対して、聖職者が対応できなかったこと、宗教本来の機能が生かされなかったことへの強烈な批判と不満があったことが挙げられよう。

アイルランドでは前述のように、1845年以降4年間続いたじゃがいも飢饉で100万人以上の餓死者を出したといわれている。死の形として、餓死は極めて残酷なものとされる。飢饉に遭った多くの人々は、移民となって祖国を棄てた。その数は10年間で200万人を数え、アイルランドの社会は、その災厄によって大きく変化した。社会が変わるだけでなく、アイルランドという限定された地域における短期間の予測を超えた大量死、しかも餓死というすさまじい死の現実、教会や宗教者の姿も変えていくことになる。

首都ダブリンでは、教会から出て飢餓の現場に立つ修道女たちがいた。そのリーダーがマザー・メアリー・エイケンヘッド(1787~1858年)であった。エイケンヘッドは行き倒れた人々を施設に運び、介護・看護し、看取りに至るまでその人たちに寄り添ったという。その施設は「ホーム」と名付けられ、後にこれが「ホスピス」(注)と呼ばれるようになる。私たちがいま、いのちの終末に、延命治療の対案として期待を込めるホスピスは、じつは大量死の現場でウブゴエをあげたものであり、しかもそれを作り上げたのは大量死の現場に立った宗教者たちであったのだ。

(出典) 高橋卓志『寺よ、変われ』(岩波新書, 2009年)一部改変

(注) ホスピス：終末期患者の痛みや症状の緩和に焦点を当て、人生の終わりに患者の感情的および精神的な要求に対処することに焦点を当てた医療の一種。

問 1 下線部①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問 2 下線部Aについて、団塊世代とはどのような世代か。本文の内容に即して100字以内で説明しなさい。

問 3 空欄Bに最もふさわしいのは次の二字熟語のうちどれか。番号で答えなさい。

- 1) 現実 2) 未来 3) 改宗 4) 変節 5) 転換

問 4 下線部Cについて、「塊のまま終息に向かう」とは具体的にはどのようなことを指すのか。本文の内容に即して60字以内で説明しなさい。

問 5 下線部Dについて、「宗教本来の機能」とはいかなる機能か。本文の内容に即して具体的に説明しなさい。

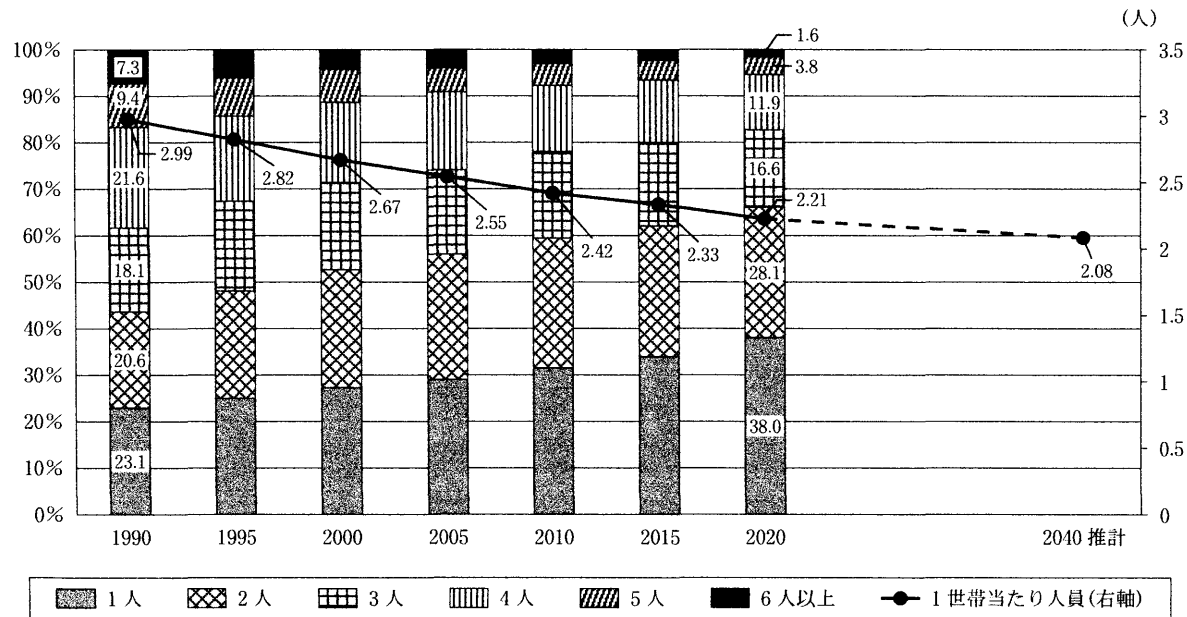
2 わが国の世帯・家族構成の変化を表す図表1～図表9を参照し、以下の問いに答えなさい。

問1 図表に関する記述として正しいものには○、誤っているものには×をつきなさい。

- ① 1990年から2020年にかけて、1世帯当たり人員の減少にともない世帯総数もそれに応じて減少している。
- ② 2020年の世帯人員2人以下の世帯数は、約3,600万世帯を超えている。
- ③ 1990年から2020年の間に、ひとり親と子どもから成る世帯の数は200万世帯以上増加した。
- ④ 単独世帯が増えた主な原因は、20～29歳の若者の単独世帯が増えたからである。
- ⑤ 単独世帯の割合は今後も増加すると予想されるが、特に高齢女性で最も高い伸び率を示すと考えられる。
- ⑥ 2000年に20～24歳だった男性の未婚率は、2020年の段階では30%未満である。
- ⑦ 18～34歳の未婚者において「生涯独身はよくない」「子どもを持つべき」という旧来的な考えを支持する割合は、女性よりも男性の方が高い。

問2 世帯や家族に起こった変化の中であなたが注目するものを図表から選び、それがどのような社会問題を今後生み出すと考えられるか述べなさい。また、その問題解決のためにはどのような共生(様々な立場の人たちが共に生きていくこと)のあり方が望ましいか、あなたの考えを論じなさい(800字以内)。

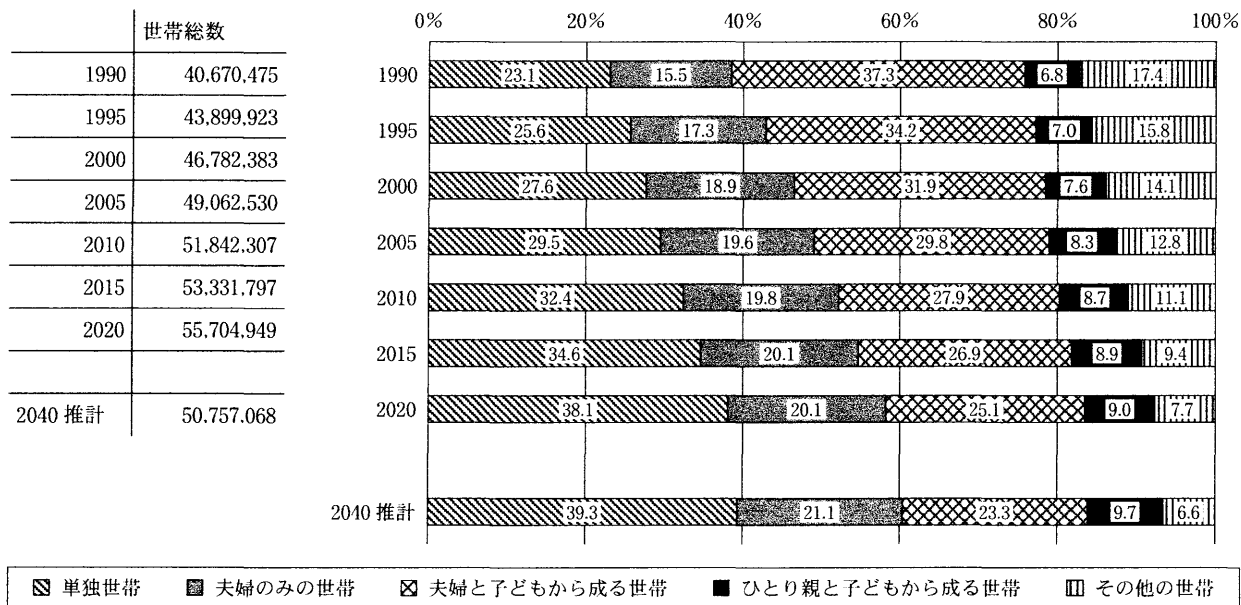
図表1 世帯人員数別世帯構成と1世帯当たり人員の推移



資料：2020年までは総務省統計局「国勢調査」、2040年推計値は国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」(平成30年推計)による。

出典：令和5年版厚生労働白書

図表 2 世帯総数・世帯類型の構成割合の推移



資料：2020年までは総務省統計局「国勢調査」、2040年推計値は国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（全国推計）」（平成30年推計）による。

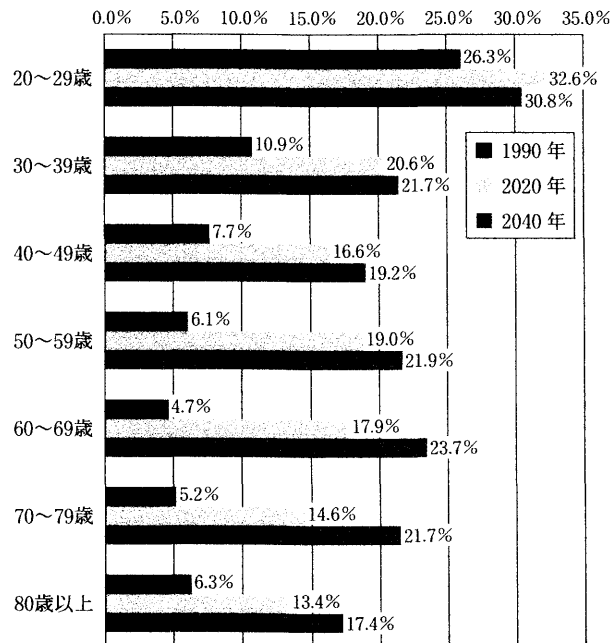
(注) 1990年は、「世帯の家族類型」旧分類区分に基づき集計。

世帯類型における「子ども」は、成年の子も含まれる。

2010年から2020年における割合は、世帯の家族類型「不詳」を除いて算出している。

出典：令和5年版厚生労働白書

図表3 年齢階級別人口に占める単独世帯者数の割合(男性)

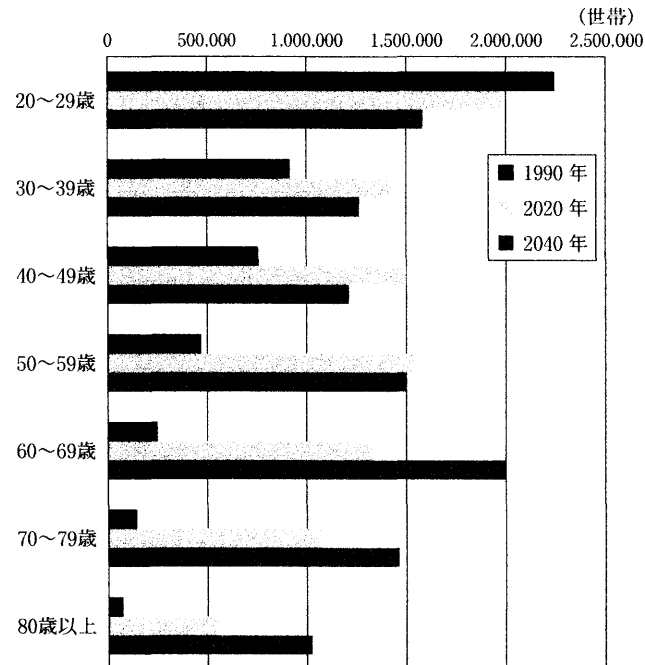


資料：総務省統計局「国勢調査」

1990年、2020年の人口は総務省統計局「国勢調査」の単独世帯数を人口総数で除したもの。

2040年推計値は国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」(平成30年推計)の一般世帯数(単独)を人口総数で除したもの。

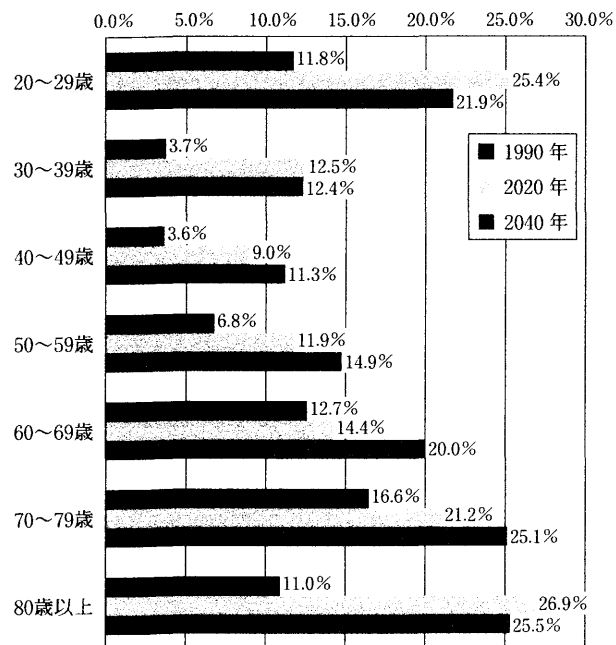
図表4 年齢階級別単独世帯数の推移(男性)



資料：2020年までは総務省統計局「国勢調査」、2040年推計値は国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」(平成30年推計)による。

出典：令和5年版厚生労働白書

図表5 年齢階級別人口に占める単独世帯者数の割合(女性)

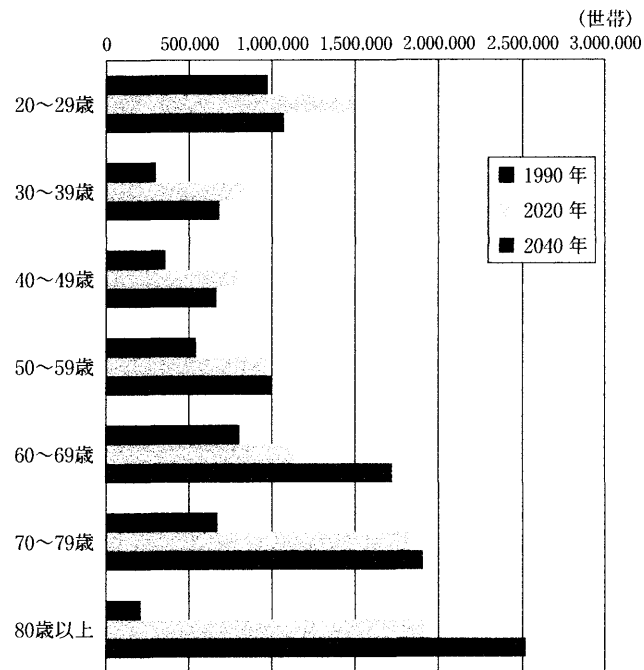


資料：総務省統計局「国勢調査」

1990年、2020年の人口は総務省統計局「国勢調査」の単独世帯数を人口総数で除したもの。

2040年推計値は国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」(平成30年推計)の一般世帯数(単独)を人口総数で除したもの。

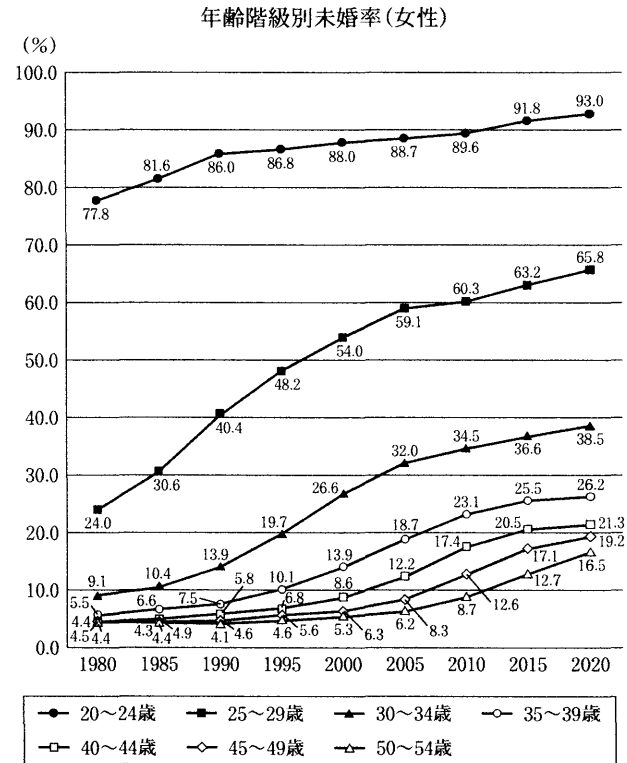
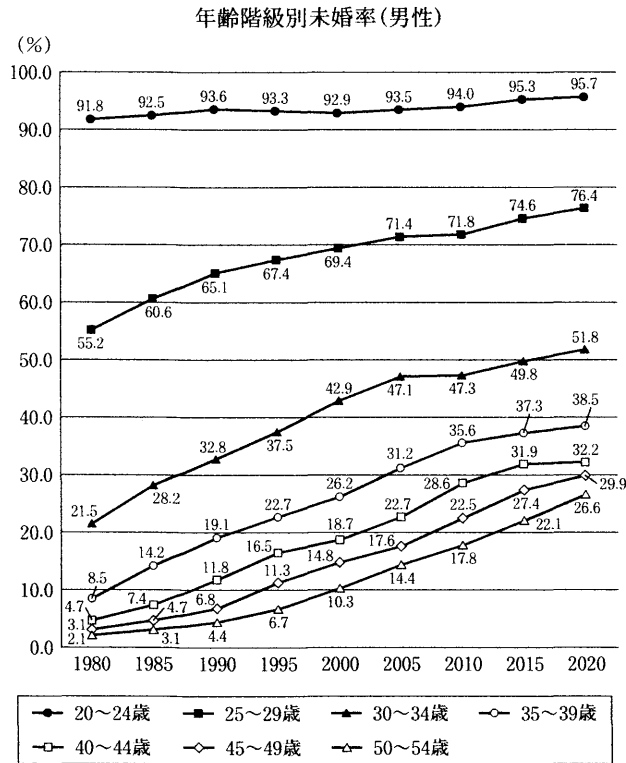
図表6 年齢階級別単独世帯数の推移(女性)



資料：2020年までは総務省統計局「国勢調査」、2040年推計値は国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計(全国推計)」(平成30年推計)による。

出典：令和5年版厚生労働白書

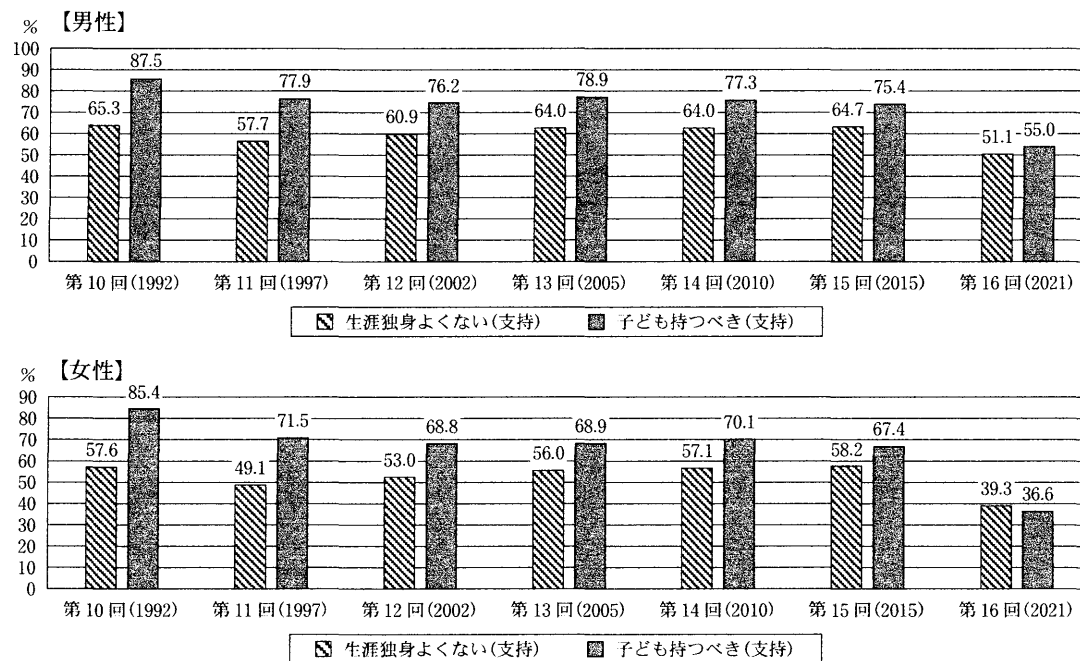
図表7 年齢階級別未婚割合の推移



資料：総務省統計局「国勢調査」(2015年及び2020年は不詳補完値)

出典：令和5年版厚生労働白書

図表8 結婚・家族に関する未婚者の意識(旧来的な考えを支持する割合)

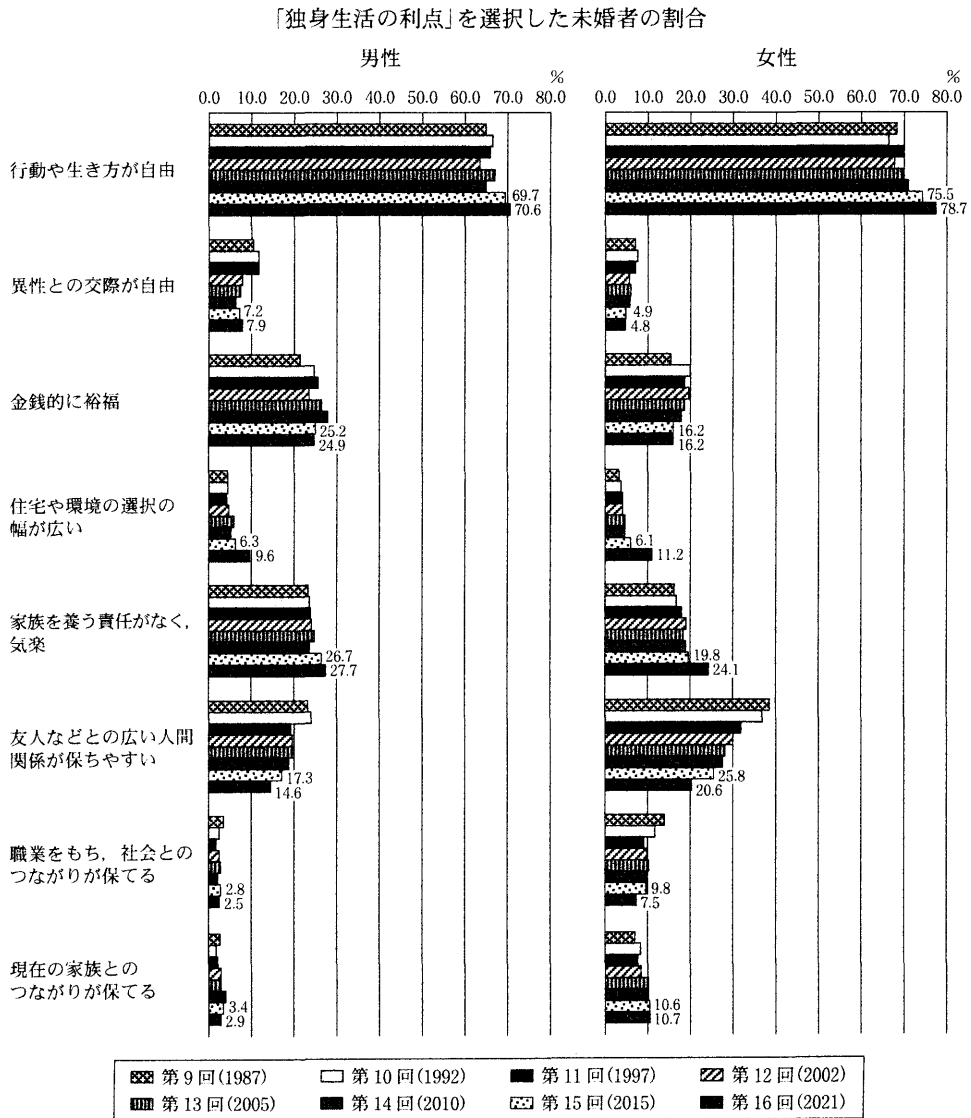


資料：国立社会保障・人口問題研究所「第16回出生動向基本調査」

(注) 対象は18～34歳の未婚者。賛成の割合(「まったく賛成」と「どちらかといえば賛成の合計割合)」を用いて、旧来的な考えを支持する割合として示している。ここでの「旧来的」は、一般に過去の調査回ほど、また高い年齢で支持されやすい考えであることを示している。

出典：令和5年版厚生労働白書

図表9 独身生活の利点



資料：国立社会保障・人口問題研究所「第16回出生動向基本調査」

(注) 対象は18～34歳の未婚者。何%の人が各項目を主要な独身生活の利点(2つまで選択)として考えているかを示す。

独身生活に利点があると回答した割合は、第9回(男性83.0%、女性89.7%)、第10回(同83.6%、89.0%)、第11回(82.7%、88.5%)、第12回(79.8%、86.6%)、第13回(83.8%、87.2%)、第14回(81.0%、87.6%)、第15回(83.5%、88.7%)、第16回(84.1%、90.3%)。

出典：令和5年版厚生労働白書